烈海王ッッッ神様転生ッッッ！！！

烈海王

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様転生杯に参加しようと思ったけど、オリ主限定なので参加できないことに気づいた没作品。

目　次

烈海王ッッッ神様転生ッッッ!!!　―　1

烈海王ッッッ神様転生ッッッ!!!

——斬られたら、そこで終わるのか。
果てのない武の道を歩む、烈海王はそんな疑問をずっと持っていた。
刃が身を切り裂き、食い込んだとして——反撃は不可能なのだろうか。
……否、と烈は考えていた。首を撥ねられぬかぎりは、十分に攻勢に転じることが可能だと。肉を切らせて骨を断つことができると。そう信じ込んでいた。
愚かな妄信だった。
古の剣豪——宮本武蔵。
かの刀使いが放つ斬撃は、あまりにも速く、鋭く、強く、そして——痛すぎた。
肉を切らせて骨を断つ？
現実は——ただ無様に、肉を斬り払われ、背骨を切断された。
世界が遠く感じた。
立ち上がることもできず——ただ、意識が薄れていった。
……次に活かせる。

そう思い――
想い――
そして――

「――ッッッ!?」
覚醒とともに、烈は跳ね上がった。
いや――跳び下がった。後方へと。
魔拳、烈海王らしからぬ反応であった。驚き、戸惑い、慌てて距離を取るなど。
だが――それも致し方ないことだったろう。
あの地上最強の生物、範馬勇次郎でさえ――もし同じ状況に陥れば、烈と同様の動きをしていたかもしれぬ。
「キサマ――」
烈はようやく言葉を発した。
抑えきれぬ困惑を抱きながら――
「ここは――――どこだッッッ!?」
――日本の建築物と思わしき、茶の間。
畳の敷かれた部屋は、日本での滞在が長い烈にも馴染みがあるものだった。

そして、ちゃぶ台を前にして座っている――眼鏡をかけた六十歳ほどの男性。
おそらくは日本人だろう。
和室にいる……日本人。
違和感は――ない。
だが――
（俺は……地下闘技場にいたはずだッッッ）
烈は武蔵と闘い、そして負け――最後の記憶はそこで終わっていた。
もし意識を失ったあと、医者による救命がおこなわれたとしても――
いるべき場所は、病室のベッドの上だろう。
そう、原人ピクルに右足を喰われた……あの時のように。
だが、現実はどうだ。
こんな日常的な空間で――烈は目を覚ました。
場所が奇妙すぎる。
こんなところにいるのは、道理に合わない。
だが――それ以上に不可解なのは。
（……無傷……だと……）
眼前の男を警戒しつつも、烈は自分の腹に目を向けた。

普段着としている唐装（チャイナ服）。
その下の生身は――明らかに無傷の感覚だった。
五体は万全であったのだ。
そう――五体が……欠けることなく、ある。
ある……失ったはずの、右足さえもッ！
なまじ自然すぎて、今ようやく気づいた有り様だった。
「ばか……な……こんな……なぜ、わたしは……」
「――烈海王」
動揺をあらわにする烈に対して――はじめて眼前の男は声をかけた。
落ち着いた声である。
事態を把握していない烈とは違い――彼は状況を理解しているようだった。
名を呼び、何を話すつもりなのか。
烈は警戒を保ちつつも、男の次の言葉を待った。
そして、次に目にした光景は――
「――すまなかった」
――ちゃぶ台に手をつき、深々と頭を下げた。
謝罪。

己の非を表明し、許しを請う言動。
——意味も、意図も、まったくわからないものだった。
「……なぜ、わたしに謝る」
「俺のせいだからだよ。お前が死んだのは」
「死——死ん、だ？　わたしは……生きているが……」
「死んでいるのさ、烈海王は。……ここは死後の世界で、俺は〝神〟だとでも思ってくれ」
「……」
くだらん。
——と、平時なら烈は吐き捨てていただろう。
だが——今は、あまりにも状況が奇怪すぎた。
致命傷を受けて、死後の世界へと旅立った——それを頭から否定することはできない。
だが、疑問も大きかった。まず烈が気になったのは——
「……わたしは、あなたに殺されてなどいないが」
宮本武蔵。
クローン技術で現代に蘇った彼に、烈は文字どおり真剣勝負を挑み、そして敗北し殺

されたのだ。
つまり死んだのは――武蔵のせいだった。
この男のせいではない。
辻褄が合わなかった。
「……最初は、本部以蔵のつもりだった」
「なに……？」
「武蔵を出すなら、誰かを斬らせきゃいけない。だから最初は、以蔵を犠牲にするつもりだった。だけどな、以蔵が本当に守護（まも）ったほうが――〝面白い〟と思ったんだよ」
――言っている意味がわからない。
それが烈の感想だった。なぜ本部以蔵が出てくるのか。そして斬らせるとは？　まるで、この男が武蔵を操っているかのような言い草ではないか。
この男は――何者だ？
……神？
ばかな、そんなものを……簡単に認められるはずが、ない。
「――泣きながら、烈を宮本武蔵に斬らせた」
「……」
烈は男を睨んだ。

歳を取っているが、体つきは貧弱な様子がなかった。若いころは肉体を鍛えていたのだろう。もしかしたら――ボクシングなどをやっていたのかもしれない。
格闘技も嗜んでいた神様など、不可思議極まりない話ではあるが。
「仮に……あなたが神だったとして」
鋭い眼光を保ちながら、烈は問いかける。
「――何が目的だ?」
そう、それが重要だった。
これが荒唐無稽な夢だという可能性もあるが、ひとまず置いておこう。
男の言い分が間違っていないとして――
「――死んだわたしに、何を求めると云うのだ」
まさか、ただ歓談しようなどという動機ではあるまい。
烈はまっすぐと男を見据えた。まともに答えないようであれば、多少の暴力でさえも辞さないつもりである。
殺気立つ烈を目にしても、男は焦燥ひとつ見せず――ゆっくりと口を開いた。
「――新しい世界に降り立ってほしい」
「……なん、だと?」
「異世界だ。つねに勝負していく、挑戦していく――それが俺の〝作風〟だ。だから

……お前を転生させたい」

「……」

烈は奇妙な表情をした。この男は、完全に自分を〝神〟だと信じている様子だったからだ。

彼の発言を真に受ける前に――烈は足を動かした。

戸口のほうへ。

部屋の外へ。

室内を抜け、建物を脱出すれば――日常の現代日本社会が存在するのではないかと。

そんな一縷の、一抹の、些細な願いを抱いて――烈はそこにあった障子を開いた。

「……ッ」

――現実は、現実ではなかった。

そこにあるのは、ただ白の空間であった。

障子を開けた先は、何もない白い虚無が広がっている。飛び込めば、いつまでも、永遠に、際限なく墜ちていくような――異空間が広がっていた。

この茶の間は、切り取られていた。

脱出は――できない。……烈海王には。

「――信じる気になったか?」

「……少しは」
障子を閉じ、烈は男のもとへ戻った。
そして、ちゃぶ台を挟んで対面に座る。
男とコミュニケーションを取らねば――何も始まらない。
烈はそう判断したのだった。
「……異世界で、赤子からやり直せと。そう命令しているのか？　あなたは」
「ちょっと違うな。姿かたちが変わったら、烈海王は烈海王じゃない。……その姿のまま、行ってもらう」
「……」
「そして……〝特典〟も付けてやろう」
「……特典、だと？」
烈は顔をしかめた。
自称神の言う、特典。
何らかのベネフィット、ということだろう。
だが――訳も分からぬ相手から贈り物を与えられて、烈は喜ぶような性格ではなかった。
もし、超常的な力でも押し付けようものなら――怒鳴りつけるつもりでいた。嘗（な）める

な、と。

生のまま自分ならばともかく――他者からもたらされた能力で生きて、何になろうか。

他人にも厳しく、自分にも厳しく――烈海王とは、そういう人物であった。

「……強いやつを用意する」

ぽつりと、呟くように男は言い放った。

「地上最強の生物、1億9000万年前の原人、江戸時代から蘇った剣豪……それに匹敵するような、強敵。それを用意してやる」

「……」

「時期は言えないが……烈という人物の前に、かならずそれは立ちはだかる」

「――それが転生の特典だと?」

険しい目つきで尋ねた烈に対して、男は頷いた。

敵をけしかけることが特典、などと宣っているのだ。

普通の人間ならば、それが〝特典〟などとは思わないだろう。

だが――烈海王は尋常ならざる武人だった。

鍛えられた肉体は、培われた技術は、人類の最高峰に近い水準に達しており――

苦戦するような敵を見つけることすら、困難だった。

『――敗北を知りたい。』

脱獄した死刑囚たちが、そう言って日本へとやってきたことを思い出す。

烈にも、その気持ちは理解できた。強すぎると、勝利がたやすく手に入ってしまうのだ。

そんな簡単な勝利に――満足感を得られるはずもない。

強い相手と戦いたい。

敗北をもたらしてくれるような――強敵と。

どこまで自分の武が通用するのか、試したいのだ。

そして――さらに自分を高みへ、山の頂上へ。

〝オーガ〟範馬勇次郎。

〝原人〟ピクル。

〝剣豪〟宮本武蔵。

そのような生物として究極の存在と、自分の全力を出しても勝てるかわからぬ相手と、ふたたび比武（ちからくらべ）ができるのならば――

「烈海王」

男は――

いや、神は言った。

「お前の答えは？」
きっと、彼はわかっていたのだろう。
烈海王ならば、どう答えるのか。
ほかに道もなく。
なれば、ただ愚直に突き進むのみ。
幾度となく口にした言葉。
それを、烈海王は――はっきりと伝えた。

「わたしは一向に――かまわんッッ！」